広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	語源細見 ： つくし・うどん・ゆきのした
Author(s)	十河，直樹
Citation	ニダバ , 23 : 132 - 137
Issue Date	1994-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047980
Right	
Relation	

論　文

語源細見

―つくし・うどん・ゆきのした―

十　河　直　樹

0．はじめに

生活していて、便利がよいから買い求め、身近に置いたりする．物はそれが出来る．それでその物も生きる．言語は、学び、聞き、地域、家族、自分自身へと学び知り使う．それを地域なり、自分なりの言語として使うから、いつしか、時間（時代）の経つことによって、元の形態とはかけ離れた形態の言語を使ってくる．それは言語の進化と言えようか．人によっては、言語の変化と言うかもしれない。

ただ、変化した言語を、人の口から、あるいは自分が口にしたとき、その言葉の元の形態、あるいは語源はどんな発想から形成されたのであろうと考える．そこで「語源は」と、急にその源を確かめたくなる．標題三語（つくし、うどん、ゆきのした）は、以前から自分なりの追及をしていた用語であった．ここにその機会ができたので発表してみたい。

1．既成語源説

信頼に足りる参考文献は、記下の三点とした。

①『大言海』　大槻文彦　著　　②『日本国語大辞典』　全二十巻

③『岩波古語辞典　補訂版』　大野晋他２名

1）ツクシ

①つくし（名）つくづくし［土筆］ノ略．其條ヲ見ヨ。

つくづくし（名）［土筆］［突くヲ重ス。突出ノ意。其形筆ノ頭ニ似ル故ニ、土筆ト書ス］杉葉ノ花。其條ヲ見ヨ。ツクシ。筆頭菜。字類抄「土筆、ツクツクシ」易林節用集（慶長）。草木門「天花菜．ツクズクシ」．源、四十七．早蕨二「蕨．つくづくしヲカキシ籠ニ入レテ」。

②つくし［土筆・筆頭菜］（名）中略．［語源説］ミヲツクシ（澪標）のツクシからで、突き立った柱の意。［野草雑記＝柳田国男］。

③つくしの項目不掲載。

つくづくし［土筆］ツクシの異称。「わらびー、をかしき籠（こ）に入れて」<源氏・早蕨>。「土筆、ツクヅクシ」<文明本節用集>

2）ウドン

①うどん（名）［饂飩］うんどんノ約。宗五大雙紙「温飩モ點心ニテ候ヘドモ、殿上ニテモ私ニテモ、急度シタル一獻ニ見及バス候」

②うどん［饂飩］（「うんどん（温飩）」の変化した語か）中略。［語源説］漢語ウンドン（饂飩）の約［大言海・国語の中に於ける漢語の研究＝山田孝雄］。温団が元であるとする説は非［塩尻］。

③うどん［饂飩］「うんどん」の転。「一にて酒あり」<言継卿記大・永七・五・二八>。「饂飩（うんどん）を一と云ふが良しと言へり」<俳・かたこと四>

3）ユキノシタ

①ゆきのした（名）［雪下］（一）虎耳科（ユキノシタ）ノ多年草本ノ名。一根ニ数葉布生ス。葉、圓扁ニシテ蟹殻ノ如ク。邊ニ岐アリテ厚シ。面ニ緑紫ニ白紋、紫モアリ。背ハ毛ナク、淡紫色ナリ。夏、一尺許リノ茎ニ白瓣、長ク垂リ、三紅瓣、短ク上ニ竝ブ。根ヨリ細紅線ヲ出シ処々ニ小葉ヲ着ク。虎耳草。（二）（三）略。

②ゆきのした［雪下］（名）①ユキノシタ科の半常緑多年草。中略。［語源説］よく雪の下に在るところから雪之下の義［名言通・日本語言学＝林甕臣］。

③不掲載。

2．既成語源説の解析

1）①「大言海」②「日本国語大辞典」③「岩波古語辞典　補訂版」の三種から、次の様な解析表ができる。

		ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ　備　考	
つくし	①	●	●	●	●	●	×	●ツクヅクシを見よ	6
	②	●	●	●	×	●	●	●［野草雑記＝柳田国男］の説	6
	③	×	×	×	●	×	×	●［源氏物語；文明本節用集］説	2
うどん	①	●	●	●	×	●	×	●不明	5
	②	●	●	●	×	×	●	●［大言海；山田孝雄］説	5
	③	●	●	●	×	×	×	●不明	4
ゆきのした	①	●	●	●	×	×	×	●不明	4
	②	●	●	●	×	×	●	●［名言通・日本語言学＝林甕臣］	5
	③	×	×	×	×	×	×	×不掲載	0
		7	7	7	2	3	3	8	37

ア　表記（ひらがな）　　イ　当て字（用字＝漢字表記）　ウ　品詞

エ　項目移転（ＡからＢへ）　オ　語源独自説　　カ　他者、他著引用、参考説

キ　他著、参考書、引用書名

2）分析表から

A　既成辞書類の要約は

1）ツクシは、元「つくづくし」と言い、「土筆」と当て字表記。中国名「筆頭菜」と記す。名詞。語源説は①突くを重ねて、突出の意。②筆の頭に似ているので土筆と記す。③ミヲツクシ（澪標）の意からで、突き立った柱の意。の都合三説。

2）ウドンは、元「うんどん（饂飩）」と称し、漢語「温飩」の約。

3）ユキノシタは、「虎耳科」を当て「ゆきのした」と音読。二辞書は、「雪下」と表記掲載。語源説は、①よく雪の下に在るから「雪之下」の義と。

B　専門分野の追究点

つくし、ゆきのしたは、植物である。当然なことながらその分野の専門家がいるはずである。つくし⇒「土筆」↔中国名「筆頭名」を検討したのであろうか。ゆきのしたの場合も似ていて、中国名「虎耳科」↔日本名「雪下」と表記。

うどんは、「うんどん」が本当に元の呼名か。漢語「温飩」の約で「うどん（饂飩）とは、疑問が募る。

3．新語源説

◆ツクシ、ツクヅクシ

1）つくし（土筆）の方言は、日本全国では五百以上の呼称があろう。その理由の一つには、子女の間で特別な形態として観ることが出来るからであろう。ところで大槻文彦博士は“ツクシの古名はツクヅクシで、突くを重ねた言葉であり、突出している意である”としている。この解釈は、土筆が春さきに地上に突き出ているさまをいったものとみえる。ツクヅクシの接頭ツク＝は後で述べるとして、語幹にあたる＝ヅク＝は、何か別の意味がある様に思えてならない。語幹、語尾に＝ズク、＝ヅクの付加した用語に、ズクシ、ミミヅク、シズク、コノハズクなどあるが、この四語の中ででも共通した要素を見つけることができる。ズクシは、ジュクシが元の語形であるが、熟した柿を指し、「まるまるとした形態をしている」。ミミズクは、木菟（みみずく）で言うまでもなく「首をすくめて着膨れした子供が懐に両手を入れた姿」に見える。シズクは、雨上りに庇から一滴落ちる形は、まさしく熟柿の形と類似する。コノハズク（木菟）の形態もミミズクと同形。四語ともに＝ズクとなっている。さらに、江戸時代の初期の言葉に、ズクニュウ（木菟入）というのがある。これ

はズクニュウドウ（木莵入道）の略されたものである。この入道も、ミミズク、シズク、ズクシ、コノハズクに似た形態をして、憎らしい坊主であると侮った言葉として使っていた。言うまでもなく、土筆の方言には、ズク系の用語がかなりあり、ヅクボウ、ヅクボ、ヅクボウサン、ヅクボンサン、ヅクンボなどその一例である。こう考えてみると、ヅクという要素には、「楕円形で、まるまるとして、頭頂がつるつるしている」という要素が自然に生れる。

2）もう一点、ツクヅクシの接頭ツク＝を、大槻博士は“突く”の意ではないかと解析している。土筆を摘んで遊ぶ子供らの唱に“どこどこ継いだ”と問いかけて遊ぶが、この“継ぐ”という意味に重要なポイントがある様に思える。つまり“突く”ではなく“継いで遊ぶ草”ではなかろうか。これを実証するような方言もかなりある。ツギグサ、ツギツギ、ツギツギグサ、ツギツギボーズ、ツギッボなど。

3）つまり、土筆の古名ツクヅクシのツク＝は“突く”ではなく“継ぐ”＝ヅク＝は、“まるまると肥えた姿の坊主頭”＝シは接尾語で、小さいものを表現した「子」。加えて日本語で「土筆」と表記するが、中国では「筆頭菜」（漢名）と表記す。これもスギナ（杉菜）：ツギナ（継ぎ菜）の要素と対立すると思うがどうでしょう。

◆<u>うどん、ウンドン</u>

1）大槻博士は、漢語「温飩」＝ウンドンの約としている。うどんに似たものには、そば（蕎麦）、そうめん（索麺）、きしめん（碁子麺）、ひやむぎ（冷や麦）、あつむぎ（熱麦）などがある。素材、技法など違うけれども形態ではよく似ている。

2）ところで“うどん”の元は“ウンドン”であろうか。鳥（からす）を「卯」と言い鵜飼（うかい）に使う鳥“う”を「鵜」と表記する。口に入れた物を一気に呑込むことを“うのみ”と言い「鵜呑み」と表記する。人が力を入れて何かに夢中になっている様子を指して“ウンジイットル”と備讃域で使う。子供同志の遊びで“にらめっこ”をする時の掛け声に“ワーローターラダメヨー　<u>ウントコ</u>ドッコイショ”と使う。力を入れて物事をする時には“ウンと力を入れて”言う。このように「ウ」と「ウン」とは、本来、別の世界で用いられてた音形であるようにみえる。

3）まず、接頭の「ウ＝」は、「ウソ」（嘘）、「ウニ」（雲丹）、「ウキ」（浮木）「ウマ」（馬）、「ウシ」（牛）、「ウソ」（嘘）、「ウサ」（憂さ）、「ウコン」（鬱金）の様に有形の物を指示した名詞として使っている。それに対し「ウン」は、「ウンチク」（蘊蓄がある）、「ウンドウ」（運動する）、「ウンデイ」（雲泥の差）など、名詞ではあるが［動き］［働き］により「差のある、またはその結果」を表現した「結果名詞」であると言えそうである。

4）次に語尾の「＝ドン」に焦点を当てて考察すると、「ドン」（呑）、「ドン」（丼＝「どんぶり」の略）、「ドン」（鈍）などで、「ドン＝」が接頭にある場合は「ド

ンヅマリ」（物事の最後。はて。また足りているさま、またそのこと。行き詰まり）を意味している。これらの要素を検討すると［固まっている］［固まった］［固定している］といった共通要素を受け取れる。

5）そこで、「ウンドン」が古語であるとして考えたなら、「ウンドン」は、饂飩（うどん）の古い形態である［団子状のものを食べ、呑む］を指した呼名であったと推定できそうである。それに対し「ウドン」は、［簾（すだれ）状の物を器＝丼に入れたもの］を指した呼名と考えられる。

◆ゆきのした

1）「日本国語大辞典」には「ゆきのした」の当て字に［雪下］と表記し、漢語表記に「虎耳草」としている。その語源説として「よく雪のしたに在るところから雪之下の義」と、『名言通・日本語言学＝林甕臣』の説を採用している。

2）ところで、雪の下に在る草は「雪の下」（ユキノシタ科の半常緑多年草）だけではない。「蕗」（ふき）もあり、「ゆきわりそう」（雪割草）など調べれば枚挙にいとまない。この「雪の下」と言う植物に対し［雪下］と表記しているから「よく雪のしたに在るところから～」とその草の語源発想と推定する。私は本論の２、２）分析表のＢ専門分野の追究点のところで、専門家の意見を拝聴する意見に触れておいた。国語、言語学者は、とかく資料検討に専念しがちな傾向にあるが、「雪の下」という植物表記は、実は「雪の舌」ではなかろうか。

3）この草の特徴点には幾つもあるが、植物学の権威者　牧野富太郎博士は『原色牧野植物圖鑑』の中で「～花弁は５枚で下の２枚が大きく目立つ」と記している。「大言海」の著者　大槻文彦博士は「～夏、一尺許リノ茎ニ白瓣、長ク垂リ、三紅瓣、短ク上ニ竝ブ。」、加えて『世界大百科事典』には「～、花茎の上部の円錐形の花序にまばらに五弁花が横向きに咲き、上方の３片は小さな卵形で、濃い斑点があり、下方の白色の２片は披針形で下垂する。」と記されてある。漢名では「虎耳草」と表記、まさに、葉や茎などに根毛があるのと、２枚の花弁を、虎の耳になぞらえた点など、ユニークな発想である。

4）方言の世界ではどうであろう。青森方言に、ベコノシタ、山口方言にはトリノシタという呼名がある。この＝シタは「下」ではなく「舌」を指した呼名と判別できる。花弁が長く垂れ下がっているので［牛の舌］［鳥の舌］と呼んだのであろう。また、

新潟県地方ではイシナメズリと言った方言がある。まさに、生育地と花弁の形態特徴を如実に表現した方言である。

5）ところで、仮に＝シタを「舌」として、この「雪の下」には、２枚の長大な花弁が垂れ下がっている。『二枚舌』（「二枚舌を使う」などと言う）ということになる。この用語は［言った事の前後の矛盾したことを言うこと。嘘を言うこと］の意味で、誰もが好んで使いたい用語ではない。そういうこなどから＝シタを「舌」と表現しないで「下」と表記したのかもしれない。しかし、どうみても私は「舌」が妥当だと思う。

4．むすび

1）この機会に、つくし（土筆）、うどん（饂飩）、ゆきのした（雪の下）の三語を選んだ理由は、実は、一音の要素研究を進めている段階の途上で機会を得たからである。「つくし」と言う用語の発祥が「ツクヅクシ」であるかどうかも、実は疑問である。古語は、清音で、二音節、三音節までだと思っていた思いを打ち砕かれた。「うどん」が「ウンドン」だと言うのも解せない。また、「ゆきのした」という植物に対する語源が、少なからず、広範囲の資料検討の後に、明治時代の語源のままである点も不思議である。

2）辞書の体質は、さまざまであろうが、「国語大辞典」と称する辞典は、国語の中心でありたい。そのためには、意味の変革、変化は社会体勢とタイアップして起こり得る事でも、［一語の語源］は、移動、移行、変化、変容してはならないと思う。ただ、こういう大切な研究は、少なくとも国家が、行政の一環として、人、時代を越えて研究していく大切な研究であると思う。なぜなら、日本という国家の母国語は、「日本語」であり、それを研究している者は、国語学者であり、国家の主流語でありつづける重要な国語であるからだ。

3）私は、基礎語と称されている語でさえ、実に『あいまいな意味解釈』である点に一日本語を研究している者として淋しさを抱いている。

◈　参　考　文　献　◈

「大言海」・・・・・・・・・・・・大槻文彦著　冨山房

「日本国語大辞典」　小学館

「岩波古語辞典」・・・・・・・・・大野　晋他２名　岩波書店

「原色牧野植物大圖鑑」・・・・・牧野富太郎著　北隆館

「世界大百科事典」　平凡社

「語源のたのしみ」・・・・・・・岩淵悦太郎著　毎日新聞社

「漢字語源辞典」・・・・・・・・藤堂明保著　學燈社

「全国方言辞典・分類方言辞典」・東條　操編　東京堂出版